2024.07.01.
T.Kobayashi

松尾芭蕉を学び直す
その生涯といくつかの旅

江東区の西端、小名木川が隅田川と繋がる所に「江東区芭蕉記念館」がある。都営新宿線の森下駅が最寄り駅になるが、今回は清澄白河駅から小名木川に沿って歩いてみた。
先月深川ぶらぶら歩きをした時に立ち寄ったのだが、資料の燻蒸消毒日で臨時休館だったので、再挑戦。
小名木川の土手は防災対策として、昔よりも高くなっているので、土手に上がらないと水面を見ることができない。遊歩道があるところだけ、土手に上がって景観を楽しんで歩いて見た。
大きな、四角く厳つい水門の向こう側に、萬年橋の柔らかな曲線が見えると隅田川が近い。
芭蕉記念館には、松尾芭蕉に関する様々な情報や資料が展示されていて、興味がある人には有益で面白い資料館だと感じた。深川に長く住んだということと、ここが奥の細道の出発点になったということで、記念館ができたようである。記念館で得た情報を元に、松尾芭蕉の生涯を整理してみた。

松尾芭蕉は、1644年（寛永21年）に伊賀の上野に生まれた。私より300年の先輩ということになる。
伊賀上野城の城下の伊賀街道や大和街道が走る町中に、「松尾芭蕉生家跡」が残されている。
19才前後から侍大将藤堂良忠に仕えたが、良忠（俳号：禅吟）の影響を受けて俳諧の世界に入り始めた。
1664年（寛文4年）に、貞門派の「佐夜中山集」に二句が入選し、俳号を宗房として禅吟とともに北村季吟に師事した。（21才）
藤堂良忠（禅吟）が 25 才で他界したことを機に藤堂家を辞して、上方で俳諧活動に入った。
1672年（寛文12年）に発句集「貝おほひ」を伊賀上野天満宮に奉納。俳風は談林風に変った。この頃俳諧師として生きることを決意し、俳諧で身を立てることを志して江戸に向かった。（29才）
1675年（延宝3年）談林風俳諧の中心的人物である西山宗因が大坂から江戸に出て開いた催しに、桃青の俳号で参加。この時期には（生活のためと考えられるが）神田上水開削工事にも加わっていた。
1678年（延宝6年）俳諧宗匠として独立することを決意して日本橋小田原町で活動を開始。（35才）
1680年（延宝8年）に、杉山杉風・宝井其角・服部嵐雪の作品を集めた「桃青門弟独吟二十歌仙」を刊行。
この年、深川の草庵に移り住み。俳諧宗匠を生業とすることをやめて、隠者生活を開始。隅田川沿いの「元番所」と言われた場所で、杉山杉風が家業の魚屋のために所持していた生け簀がある所だった。ここに建てた草庵は「泊船堂」と名付けられたが、門人の李下から贈られた「芭蕉」が生い茂ったことから「芭蕉庵」と言われるようになり、俳号として「芭蕉」が使われるようになった。
芭蕉庵から近い所にある臨川庵に滞在中の、常陸国鹿島の根本寺の仏頂禅師との交流が始まり、禅への傾倒のきっかけとなった。臨川庵は、1653年（承応2年）に鹿島の根本寺住職である冷山禅師が庵を結んだのが始まりで、仏頂禅師の尽力により1713年（正徳3年）に山号寺号を得て、臨済宗妙心寺派瑞甕山臨川寺となった。
1682年（天和2年）、江戸の大火（振り袖火事）により芭蕉庵は焼失してしまい、家を失った芭蕉は門人である高山麋塒（びじ）の家（甲斐国　谷村）に一時避難。
1683年（天和3年）、杉山杉風ら門人の尽力によって再建された深川芭蕉庵に復帰。
1684年（貞享元年）、門人の苗村千里（ちり）とともに「野ざらし紀行」の旅。旅の主目的は伊賀上野の母の墓参と大垣の谷木因（ぼくいん）と会うことだったらしい。（41才）
深川を出て、伊勢・伊賀・大和を経て吉野、美濃大垣・桑名・熱田・名古屋経由伊賀上野に帰省。故郷で越年後大和・京都・近江を経て江戸に戻る約9ヶ月の旅。
1686年（貞享3年）芭蕉庵で門人達40人が集って「蛙」を題材にした句会を開催。ここで、あの有名な一句「古池やかわず飛びこむ水のおと」が生まれた。これまで「蛙」を題にすると、「鳴き声」をとらえる手法が伝統的な蛙の表現だったが、「飛ぶ動作」と「その音」を切り取り、さらに「静寂さ」を強調して詩情を高めているとして高い評価を得た。

1687年（貞享4年）8月には、河合曽良と知人の宗波をともなって「鹿島紀行」。旅の目的は鹿島神宮参詣と筑波山の月見、そして鹿島根本寺の仏頂禅師を訪ねること。いくつもの旅を積み重ねた人生だが、千葉・茨城方面への旅はこれだけのようなので、少しばかり踏み込んで見ることにした。
紀行によれば、深川から船で出て小名木川を東へ進み行徳へ。そこから陸路を八幡に出て千葉街道に入り、鬼越から木下街道に入ったが鎌ケ谷経由布佐まで進み日没。布佐で一泊の後、夜明け前に船に乗って鹿島へ。この時代の鹿島詣の旅はこのコースが一般的だったらしい。
1687年（貞享4年）10月に「笈の小文」の旅。江戸を出て尾張・三河と歩いて伊賀上野で年末を迎え、年明けに伊勢・大和・紀伊・摂津から播磨明石を経て須磨で源平の古戦場を訪ねて旅が終る。卯年から辰年にまたがる旅ゆえに「卯辰紀行」とも呼ばれた。（44 才）
1688年（元禄元年）、門人の越人を伴って美濃国を出発して信濃の姥捨山へ仲秋の名月を見に出かけた。
この旅は「更科紀行」としてまとめられて観月の場面で終っているが、さらに善光寺・浅間山などをまわって中山道経由で江戸に戻っている。（45 才）
しばらくは深川での門人との俳諧活動に専念するが、1689年（元禄2年）年明け頃から、奥州行脚の予定が親族や知人に語られており、「奥の細道」の計画が練られていたようである。
1689年（元禄2年）の春、芭蕉庵を人に譲り、河合曽良をともなって「おくのほそ道」の旅。この旅の目的は、古より和歌に詠まれた歌枕の地を訪ねることにあり、特に平安時代の歌人西行法師ゆかりの地を訪ねて自分の目で見て句作をしてみたいという考えによるものだった。（46 才）
みちのくを歩き、日本海側を歩いて越前から美濃へという長途で、旅は大垣で終ってはいるが、大垣から伊勢神宮に向かい式年遷宮を参拝後伊賀に帰省して、大津・膳所・京都を何度も旅している。
1691 年（元禄 4 年）の暮れに深川に戻り、芭蕉庵があった場所の近くに再建された第三次芭蕉庵に落ち着いた。新たな門人も加わり句会は活況を呈するが、長年世話してきた甥の桃印が元禄6年に他界し、芭蕉自身も心身共に衰弱が始まった。
1694年（元禄7年）に入り再び俳諧活動が活発になり5月に上方への旅に出たが、10月12日に逗留中の大坂の門人花屋仁右衛門宅の離れで、51才で他界。
本人の遺言に基づき、遺体は膳所の義仲寺に葬られた。義仲寺は、源頼朝に敗れた源義仲（木曽義仲）が死んだ後、愛妾であった巴御前が墓所(小塚)の近くに草庵を結んで供養をしたのが始まりと言い伝えられている。
室町時代末期に、近江守護であった佐々木六角が天台宗義仲寺を建立したと言われている。
芭蕉は30才代で臨済宗の僧侶との交流から禅宗に傾倒したが、命果てる時には天台宗の義仲寺を選んだ。
芭蕉は義仲寺とその周辺の景観を大変気にいっていたようだが、それ以上の何があったのかはわからない。

旅に病んでゆめは枯れ野をかけめぐる

最後の句となったこの句は、他界の4日前の作と言われている。
西行法師は500年余り昔になる1190年2月に、大坂南河内の弘川寺裏山に草庵を結んで、亡くなっている。
絶えず意識してきた存在である西行法師の終焉の地に近い所で息絶えたのも、何かの因縁かもしれない。

弥生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峯幽かにみえて、
上野谷中の花の梢又いつかはと心ぼそし。むつましきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗て送る。
千じゅと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく。
行春や鳥啼魚の目は泪

芭蕉記念館裏の植え込みに上って新大橋方面を眺めていたら、一艘の小舟が千住大橋を目指して揺れながら上っていく姿が目に浮かんできた。

以上

●参考情報

江東区芭蕉記念館　https://yahoo.jp/-C_GfZ
芭蕉稲荷神社（芭蕉庵跡）https://yahoo.jp/oqizkp
深川ぶらぶら歩き　http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/fukabura.pdf